

# R 国 語 問 題

## 注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっていました。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

世界は配置 (disposition) であり、人間は自らを取りまく配置によってたえず態勢づけられている (disposed)。デイスポジション (disposition) という語は、特定の学問領域における中心的概念として機能してきたのではなく、むしろ英語においても仏語においても日常的に用いられる言葉である。しかし、それと同時にデイスポジションは、さまざまな領域のテキストにおいて、まさに領域横断的に見出され、ある共通の展望を拓いてもいる。その展望とは、<sup>(1)</sup> いわゆる近代的世界観とは別の可能性の提示にほかならない。

デイスポジションの語源である、ラテン語の *disponere* という動詞は、分離を示すセットウジ *dis* と「置くこと」を意味する *ponere* によって構成されている。距離をあげて置く、すなわち「配置」がこの語のもっとも古い意味である。ここから事物を配置するための行動や能力、配置されるための条件といった意味、さらには、ある行為や状態に向かう性向・傾向性・態勢といった意味が生じてきた。

デイスポジションは、世界を様々な諸要素の「配置」として捉えることを可能にし、また、人間の行為や自然物の性質を「習慣づけ」や「能力」という観点から捉えることを可能にする。これをまた別様に言いかえるならば、この概念は、世界を存在者同士の関係として捉えることを可能にし、また、その関係によって生じる「力」や存在者が帯びる「傾向性」に光を当てる。こうしたデイスポジション的な世界理解に対置されるのは、世界を認識主体の構成物あるいは表象として捉える近代的な世界観にはかならない。この意味で、デイスポジションは、いわゆる「自我の形而上学」に対する批判的視点を構成すると言える。そして、もし私たちが、人類の精神史を古代から参照しなおすならば、実に世界を「配置」として捉える思考方法が中心であった期間は、世界を認識する意識的な「主体」が幅を利かせている期間よりも、ずっと長いことに気付かされる。

デイスポジションは、明晰判明な主観を基盤とする世界観とは異なる仕方で世界を描き出しうる。こうした展望を獲得した際に、筆者が夢想したのは、うまくいくこと (going well) をこの概念によって生け捕りにする<sup>(2)</sup>

とであつた。「うまくいく」は非人称的である。「うまくいく」は、その一連の流れにどのような形であれ参与している複数の存在者たちの「うまくやる」と無関係ではないが、少なくともうまくいっている時、私たちは人称というものを意識しない。こうした非人称的な「よく」(well) が成り立つとき、一体なにが起こっているのだろうか？ とある場所に複数の存在者がいる。<sup>(3)</sup> その複数の存在者と適当に快適であるためには、「愛」という情感たつぷりの概念が示す実践はおそらく不適當である。とりわけ子供や動物といった敏感な存在者に顕著なことであるが、強いインテンションの媒介は、むしろ存在者を緊張させ、ぎくしゃくさせることがある。「責任」や「共同性」も、同様の意味で、強すぎるかもしれない。「愛」や「責任」や「共同性」などの強い概念を用いずとも、ちよつとした気配りや配慮によつて、複数の存在者たちの共存がうまく立ち行くことを、私たちは経験上よく知っている。私たちが意識化することも容易ではないような仕方、つまり極めて適当に「氣」を配つたり、「思ひ」を遣つたりすること。ここから倫理や美学を考えることはできないだろうか。

たとえばサッカーのプレイにおいては、複数のプレーヤーたちが「うまく」ボールを運ぶときに、ボールの移動は全体としてうねりをなす。このうねりは、ボールをまわす時の、個々のプレーヤーのある程度の「氣」遣いによつて実現している。ボールへの接触の強弱は、ある程度の「氣」遣いによつて調整されなくてはならない。ボールに向かつて走りこむ誰かもまた、走るスピードの緩急を、あるいは足の出し方を、今ボールを持っているほかの誰かの動きを感じながら調整するだろう。この調整を実現している配慮とは何だろうか？ あるいは、ある曲を複数の人間で演奏している最中に、ある人間が他の人のリズムや音色を感じながら、自分のパートを演奏し始める瞬間の気遣いでもいい。もしくは、見知らぬ子供同士が砂場でソウグウした際に、たいした会話も交わさぬまま、一緒に砂をほじくりながら、ときには道具を貸し借りしながら、うち解けてゆく際に、彼らがしている気配りのようなもの。<sup>(4)</sup> こうした配慮とも呼べないような配慮、「氣」遣いは、おそらく理性的な判断や意識に還元されるものではない。

こうした気遣いや配慮の前提となつているのは、自分以外の存在者(たち)が生き、運動し、活動していると

いうことであり、それと同様に自分自身もまた生き、運動し、活動しているということである。つまり自分も動いているということを前提としつつ、相手の動きに合わせてゆく、あるいはその逆の実践がここにはある。互いに活動する存在者同士においては、主客も能動受動も容易に入れ替わり得るだろう。競馬の騎手、福永祐一は、馬と騎手の関係について、大変興味深いことを述べていた。騎手には、馬の力を一二〇パーセントにすることなどはできない。馬に騎手が乗った時点で、騎手は馬に対してマイナスにしか作用しない。だから、騎手にできることは、そのマイナスをできるかぎり少なくすることなのだ。「うまくいく」ために活動している存在者同士の関わりとはまさにこのようなものかもしれない。自分の関わりなしで世界は一〇〇パーセントのポテンシャルを持っている。この一〇〇パーセントの活動可能性をいかに一〇〇パーセントにしてもらうか。「うまくいく」ことを目指す存在者は、互いにそのような態度で接し合う。そこで問われるのが、活動しているもの同士の配置、距離、関係である。騎手はもちろん減量もするだろうが、大切なのは言うまでもなく、馬の姿勢に対する騎手の姿勢であり、馬の運動に合わせた体重の移動だろう。この配置が、その都度その都度、何らかの仕方で測定されて、関わりの程度が、一瞬のうちに決定される。

この関わりの「程度」は完全に数値化できるものではない。そして既存の概念もまた、なかなかこうした「うまくいく」ための関わりを十分には言い表してはくれない。「調和」「統一」といった概念は、美学的でもあり倫理的でもあるが、いずれにしてもこれらは、全体において成し遂げられた構成に向けられた概念であり、あれとこれが「うまくいっている」ことを示すには不十分である。こうした事実を前に、「うまくいく」を言語化不能なものとして認識の外部に置くのは、あまりにも口惜しいように思われる。確かにうまくいかない事態、しかもうまくいく可能性すら見出せない事態は、枚挙に□がない。しかし、このたくさんのうまくいかない状況にも拘わらず、私たちは、あるいはサッカー選手たちや演奏家たちや子供たちは、あるいは馬と騎手は、確かに「うまくやってきた」のである。あたかも、蘭と自らの使命を知らずに蘭の受粉を手伝うスズメガのように。

(5) ここには希望がある。

かつて、倫理は、先ほど述べたようなさまざまな「強い」概念によって語られてきた。このように強い概念が必要とされたのは、倫理の担い手として、「主体」や「意識」や「意志」といった強い概念が前提になっていたからである。世界を回収する自己認識や主体を前提とする限り、「うまくいく」はこうした強い概念を逃れて、生活の内に留まり続けるだろう。「うまくいく」は、認識する主体や意識に先行する、生き生きと活動する存在者たちを前提とするのだから。これまでの概念体系では捉えられなかった「うまくいく」は、幸福な倫理の可能性であり、それは、まだまだ十分に言葉を与えられていないわたしたちの経験やその記録のうちにこそあるのではないか。少なくともそのように信じることから始めてみたい。

この先、ここでデイスポジションと呼んでいる力関係は、より具体的に手触りのある表現を獲得し、また、「主体」と呼ばれてきた自己意識は、様々な力関係の中でたえず新しく態勢付けられる生の担い手へと姿を変えることだろう。その結果、私たちは、従来の倫理や美学が成し遂げたのとは別の表現で、おそらく概念と表現がフック不離になるような仕方、「うまくいく」ことについて語ることが可能になるかもしれない。もはや倫理や美学という大袈裟な名称も必要としない、ただ「うまくいく」ことの可能性が、垣間見えるかもしれない。

（柳澤田実「馬に乗るように、ボールに触れ、音を奏でるように、人と関わる」による）

## 問

(A) 線部(イ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 線部(1)について。「いわゆる近代的世界観」とほぼ同様の内容を表している一続きの部分を、本文中から抜き出し、十五字以上二十字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(C) ——線部(2)について。ここでいう「生け捕りにする」とはどういうことか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 認識主体の構成物として捉えること。
- 2 生き生きとした動きを想像すること。
- 3 無意識に行われる配慮を意識化すること。
- 4 手触りのあるかたちで表現すること。
- 5 変化する関わりを程度を数値化すること。

(D) ——線部(3)について。「不適當である」理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 お互いに活動する当事者たちの気配りを困難にしてしまうから。
- 2 「責任」や「共同性」という概念を同時に用いられなくなるから。
- 3 愛する対象以外の存在が自分の意識の外部に置かれてしまうから。
- 4 共に活動している相手の力がプラスに作用してしまうから。
- 5 当事者たちの能動受動の関係が容易に入れ替わってしまうから。

(E) ——線部(4)について。この説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 相手に対するマイナスを、可能な限り少なくするように努めること。
- 2 相手が言葉を発しなくても、その思いを常に自分が意識すること。
- 3 活動中の動きの主体を、自分と相手で交互に入れ替えること。
- 4 自分と相手との距離を常に測定し、関わりを程度を決定すること。
- 5 意識的ではないが、極めて適当な気配りによって調整すること。

(F) 空欄  にはどんな言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 遑 いしよま
- 2 隙 ひま
- 3 曲 まがく
- 4 類 るい
- 5 例 れい

(G) 線部(5)について。「ここに希望がある」理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 これまで説明できなかった関わりの「程度」を数量化することにより、「うまくいく」を語る可能性があるから。
- 2 従来の美学や倫理学の概念が、「配置」の概念により新しく態勢付けられ、「うまくいく」を説明できる可能性があるから。
- 3 意図しない形で「うまくやってきた」事例が既にあり、そこから「うまくいく」を言語化する可能性が与えられているから。
- 4 「うまくいく」は近代的世界観では捉えられない存在者たちを主体とするため、今後とも消滅することがないから。
- 5 「うまくいく」を説明できる可能性がある学問は、従来の美学や倫理学以外にも無数に存在しているはずだから。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

芸術を背景としたデザインの教室では、人間が作りだす道具や環境に「かたち」を与えることを学生たちは学んでいる。そこでは「行うこと」が最初にある。作品を「作ること」、それを「見ること」、それについて「話すこと」が、デザインの学びの「行うこと」である。それらの行為をとおして、学生たちはデザインの問題について考えデザインを「知ること」にたどりつく。「知ること」が再び「行うこと」である制作を<sup>①</sup>カンキする。「行うこと」と「知ること」が相互に結びつき、aしながら学びをすすめるのが「<sup>①</sup>やってみて—わかる」型の学びである。

この学びの型は、「<sup>②</sup>知ること」を中心とした「覚える」型の学びとはその組み立てが異なっている。学生たちが目標にする仕事があり、からだを動かし活動することが学びのbとなっている。デザインについて知っていることと、デザインができることは同じではない。デザインは本からではなく、活動から学ぶことのできる種類の学問である。

デザインの学びはもちろん「知ること」も重視している。芸術の教育が「行うこと」に着目してきたのは、学生たちが「知ること」、いや、知りたくなることの源が活動の中にあると考えるからである。対象を正しく「説明する」仕方を身につけることからではなく、対象を物や事として実際に「表現する」ことから、自分がいる社会環境を自分たちで考え形成していくことが始まる。そう考えるのがデザインの営みの<sup>②</sup>リツキヤクテンなのである。

「かたち」という問題を扱うデザインの学びが重視するのは「創造性」<sup>③</sup>である。学生たちは自分の創造的な力に気づき、それをさまざまな先入観や制約から解きはなち、<sup>③</sup>ミガいていく。そのために教室で行われることは「作品」を作ることである。教室の外にある生活や社会活動と密接に結びついたものとして作品制作という活動が実践される。



作品制作活動の基本的な構造は、「作る人」と「外側の世界」のかかり合いとして描くことができる。両者のかかり合いにおいて作品が生まれる。<sup>3)</sup>生まれた作品は、はじめの頃は作る人の近くにあるが、やがて外側の世界に出て作る人を離れてそこに存在することになる。

制作をとおしたデザインの学びには、二種類の活動がある。「行う（やってみる）」活動と「知る（みてわかる）」活動である。「作ること」と「わかること」といったほうが適切かもしれない。二種類の活動は「みる」ことで結びつけられている。「行う」活動とは、作る人が自分のからだの外側の世界に向かって形を表現し、外側に生み出されたその形を「みる」ことから何かを受け取ることである。「知る」活動とは、制作過程で行われているさまざまな表現行為によって外側の世界に現われる形の生成をみることから、表現のプロセスとその組み立てを理解し自分のものにするのである。

「行う」活動と「知る」活動のセットは制作過程の小さな単位にも生じる。形を「作る」たびに、そのつど「わかる」ことがある。たとえば、自分が一本の線を描くことが次に引く線を決定する。「作る」ことの大きなゴールは、作品を実現し外側の世界にそれを存在させることである。それによって、作品は他者が関わることのできる社会的な活動の対象となる。この段階に至れば、作る人に大きな「わかる」活動が生まれ、「デザインとは外側の世界とつながった活動なんだ」という理解が得られる。教室の外にある活動と教室の中の活動が結びついたものとして行われるところにデザインの学びがある。

知識は一度与えられてしまえば、それを自分で手に入れることを経験することはできない。他人から教わることによってでも、人はあることについて「知ること」ができる。しかし、あるときその人が本物のそれに出会っても、「ああ、これが教室で見た、聞いた（あれ）なのか」という関係しか生まれてこない。自分で「わかる」という根源的な出会いがそこに生じない。創造する力は、この自分で形をつくり外側の世界に対象を生み出すことから、それを自分で感じ自分でわかるという根源的な出会いの中に育つ。だからデザインの学びは常に「作ること」から始められる。

「知ること」は「作る」過程で生まれてくるものだ。知識は制作に必要となれば自発的に構築され、またあるときは外側から獲得する対象となる。そうなるためには学びの二つの状態が、学生たちに意識されることが必要となる。自分の「できない(ブレイクダウン)」状態と「できる(ブレイクスルー)」状態である。

作品を制作する過程で、「作る」ことが前に進まないというような、さまざまな障害にぶつかると、それが「できない」状態である。障害にぶつかっていること、そこで停滞していることに学生たちはなかなか気づかない。教師はブレイクダウンを指摘し、その状態こそ重要であることを学生たちに伝える。「できない」状態を認識することによって、対峙している問題の存在がはじめて彼らに「みえる—わかる」のである。彼らが手に入れるのは、自分たちが対面している問題は何か、さらに考えなければならぬことは何か、そして、その問題を考えるために必要なことは何か、新たに学ぶべきことは何かなどである。

問題が「みえる—わかる」ことをとおして、それを形にする、「やって—みる」ことが前進する。それを繰り返し返していくことで「できる」状態が生まれる。すると、「作る」ことができなかった状態が消え、制作活動のできなかった部分が「できる」状態に入れ換わる。作れたことによって新たな「わかる」こと、つまり

c が構成される。

「できない」状態から「できる」状態への自分自身の変化を意識することが、制作のエンジンになっている。この変化を獲得することのなかにこそ「創造性」の学びがある。そのことに気づいた学生たちは、以後「できない」状態を大事に探すようになる。

(須永剛司「情報のデザインと経験の形」による)

問

(A) ~~~~~線部①③と同じ漢字を含むものを、左記各群の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

①カ<sup>ン</sup>キ

- |   |                           |   |                           |
|---|---------------------------|---|---------------------------|
| 1 | 大切な客人をカ <sup>ン</sup> タイする | 2 | 大臣に辞任をカ <sup>ン</sup> コクする |
| 3 | ストライキをカ <sup>ン</sup> コウする | 4 | 証人カ <sup>ン</sup> モンと呼ばれる  |

②リ<sup>ツ</sup>キヤ<sup>ク</sup>テ<sup>ン</sup>

- |   |                                     |   |                        |
|---|-------------------------------------|---|------------------------|
| 1 | 顔のリ <sup>ン</sup> カ <sup>ク</sup> を描く | 2 | 願いをキヤ <sup>ツ</sup> カする |
| 3 | チカ <sup>ク</sup> 変動が生じる              | 4 | カ <sup>ツ</sup> サイを浴びる  |

③ミ<sup>ガ</sup>いていく

- |   |                          |   |                                     |
|---|--------------------------|---|-------------------------------------|
| 1 | 仕事をジャ <sup>マ</sup> する    | 2 | 冗談をマ <sup>ニ</sup> 受ける               |
| 3 | アマ <sup>色</sup> の髪の毛     | 4 | 歳月をシ <sup>ョ</sup> ウ <sup>マ</sup> する |
| 5 | キヤ <sup>タ</sup> ツで荷物をおろす |   |                                     |

5 貿易マ<sup>サ</sup>ツ

(B) 空欄 a にはどんな言葉を補つたらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- |   |    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 循環 | 2 | 転回 | 3 | 連結 | 4 | 同化 | 5 | 反芻 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

(C) ~~~~~線部(1)・(2)について。左記各項のうち(1)の型の学びであるものを1、(2)の型の学びであるものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 料理の作り方を読みながら、作ったことのない料理を作る。

ロ 骨董市に並んでいる皿やつぼを見て、その真贋を見分ける。

ハ 運動会で飾られている万国旗を見て、それがどこの国の旗かわかる。

ニ レストランでワインを飲んで、その年代と産地を当てる。

ホ 図解してある教本を読んで、さかあがりをする。

ヘ 辞書を引きながら、外国語を日本語に翻訳する。

- (D) 空欄  にはどんな言葉を補ったらいいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。
- |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| 1 予兆 | 2 目的 | 3 前提 | 4 要素 | 5 過程 |
|------|------|------|------|------|

(E) 線部(3)について。それによって何が可能になるのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 作者が、作品制作を通してその過程を理解し、自分のものにする事。
- 2 制作過程で現れる形が、外側の世界に向かって表現される事。
- 3 生まれた作品が、他者が関わる事のできるものとなる事。
- 4 生まれた作品が、他者に外から見られる対象となる事。
- 5 作者が制作過程におけるさまざまな表現行為を実現させる事。

(F) 空欄  にはどんな語句を補ったらいいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- |          |         |         |
|----------|---------|---------|
| 1 いかにするか | 2 何を作るか | 3 新たな問題 |
| 4 新たな変化  | 5 明確な意識 | 6 明確な存在 |
- (G) 線部(4)について。そうなるのはなぜか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 「できない」状態から「できる」状態への変化が生じさえすれば、「創造性の学び」は実現されるから。
- 2 「やって—みる」ことを前進させるためには、「できない」状態を自発的に求め、自分の力でその状態に気づかなければならないから。
- 3 自分が「できない」状態に在ることを認識することで、何が問題で何を考え学ぶべきかがわかるから。
- 4 「できない」状態が見つければ、「やって—みる」ことができ、創造的な作品を作ることができるから。
- 5 自分が「できない」状態に在るときしか、知識を自発的に構築したり、外側から獲得できたりしないから。

(H) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 本などに書かれている知識や人から教えてもらった知識との間には、根源的な出会いが生じない。

ロ デザインの学びには、様々な先入観や制約からの解放がなくてはならない。

ハ デザインの学びの「行うこと」は、対象を物や事として実際に「表現する」ことである。

ニ 学生が自分が「できない」状態にいることに気づかないのは、彼らがその状態の中でも制作を続けることができるからである。

ホ 作品制作過程の小さな単位において生じる「わかる」活動を自覚的に進めなければ、大きな「わかる」活動につながらない。

三 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に記入すること)

白河院の御時、天下に殺生を禁制せられたりければ、国土に魚鳥のたぐひ、絶えにけり。その頃、貧しき僧の、老いたる母を持ちたるあり。その母、魚なければ、ものを食はざりけり。たまたま求め得たる食物も食はずして、やや日数を経るままに、老いの力、いよいよ弱りて、今はたのむかたなく見えけり。僧悲しみて、尋ね求むれども、えがたし。思ひあまりて、<sup>(2)</sup>つやつや魚とる術も知らねども、みづから桂川の辺にのぞみて、衣に<sup>(注1)</sup>ただすぎして、魚をうかがひて、小さきは<sup>(注2)</sup>やを一つ二つとりて、持ちたりけり。禁制の重き頃なれば、官人これをからめ取りて、院の御所へ来て参りぬ。まづ子細を問はる。「殺生の禁断、世にもるところなし。<sup>(3)</sup>いかでかその由を知らざらむ。いはむや法師の形として、その衣を着ながら、この犯をなすこと、<sup>(4)</sup>ひとかたならぬ咎、のがるるところなし」と仰せ含めらるるに、僧、涙を流して申すやう、「天下にこの禁制重きこと、みな承知するところなり。この制なくとも、法師の身にて、<sup>(5)</sup>このふるまひあるべからず。ただし、われ、老いたる母を持ちて候ふが、ただわれ一人のほか、頼みたる人なし。<sup>(6)</sup>よはひだけ、身衰へて、朝夕の食たやすからず。われ、また貧家にして財なければ、心のごとくとぶらふにあたはず。なかにも魚なければ、ものを食はず。<sup>(4)</sup>この一天の制によつて、魚鳥のたぐひなきあひだ、身の力、すでに弱りたり。これを助けむがために、<sup>(7)</sup>心のおきどころなきままに、いまだ魚取る術も知らねども、思ひのあまりに、河のはたにのぞめり。罪を行はるること、<sup>(8)</sup>案のうちに侍り。のがるべからず」と申す。「ただし、この取るところの魚、今は放つとも生きがたし。<sup>(8)</sup>身のいとまをゆりがたくは、これを母のもとへ遣はされて、いま一度、あざやかなる味をすすめて、心安くうけ給ふを聞きて、<sup>(9)</sup>いかにもまかりならむ」と申す。

これを聞く人、涙を流す。院、聞こしめして、養老の□、浅からぬをあはれみ感ぜさせ給ひて、さまざまの子ども、馬車に積み、たまはせて、許されにけり。ともしきことあらば、なほ申すべき由をぞ<sup>(=)</sup>仰せ含められける。

(注) 1 たまだすき——たすきの美称。

2 はや——コイ科の淡水魚。

問

(A) 線部の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(B) 線部(1)はどういう状態を指すか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 断念せざるをえないこと

2 あきらめきれないこと

3 何も信じられないこと

4 何も期待できないこと

5 命が危なくなつたこと

(C) 線部(2)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 かんたんに

2 むやみに

3 まったく

4 ひたすら

5 こつそり

(D) 線部(3)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 どうしてそのことを知らないはずがあるか

2 どうしてもそのことを知りたいものだ

3 どうしてそのことを知ることができのだろうか

4 どうしてそのことを知らせずにいられようか

5 どうしてもそのことを知られないようにしたいものだ

(E) 線部(4)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 かなり重い罪

2 あばかれた罪

3 一方的にかぶせられた罪

4 一時的に許される罪

5 正当化されそうな罪

(F) 線部(5)は具体的にどのような「ふるまひ」を指すか。その内容を含む一文を文中から探しだし、初めの三字を記せ。ただし、句読点は含まない。

(G) 線部(6)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 弱りきって 2 背丈も縮み 3 杖にすがり 4 年を取り 5 世にうとまれて

(H) 線部(7)はどのような状態を指すか。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 どうしようもない状態 2 浮かれた状態 3 気ままな状態

4 満足できない状態 5 疲れ切った状態

(I) 線部(8)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 この身に何か奇蹟が起きそうにないならば

2 この身がまったくいいことをきかないならば

3 この身がすこしずつ変調をきたしたならば

4 この身の自由がしばらくでも許されないのならば

5 この身がいずれはどこかに流されるのならば



(J) 線部(9)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 どこへでも出ていきましよう。
- 2 どのようにでもなりましよう。
- 3 どうしたらいいでしょうか。
- 4 どんなにかいいことでしょう。
- 5 どちらでも何とかなるでしょう。

(K) 空欄  はどんな言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 川
- 2 食
- 3 志
- 4 財
- 5 業

(L) 線部(イ)～(ニ)はそれぞれ誰の動作・行為か。左記各項の中から最も適当なもの一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- 1 白河院
- 2 僧
- 3 僧の母
- 4 官人
- 5 語り手

(M) 線部の「れ」の文法上の意味は何か。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

- 1 尊敬
- 2 自発
- 3 受身
- 4 可能
- 5 推定(推量)

【以下余白】



